

いことである。

筆

どのような筆で書くのかは、作品に大きい影響を与える。たいていは馬や豚の毛からできた筆だが、羊毛の筆はやわらかく、人の赤ちゃんの産毛でつくられた筆はさらにやわらかい。やわらかい筆は、なかなか使うのが難しい。やわらかい筆は、異なった味わいがあることもあるが、やはり無理をせず、普段つかいの筆で書くことになる。

紙

様々なタイプの和紙の中から、自分がつくろうとする作品にもっともふさわしいものをえらぶ。墨をたっぷりと吸いやすい和紙にするか、ほとんど吸わないものにするか、あるいは、筆のすべり具合がよいものにするか、筆が紙に引っ掛かるような具合の紙にするかなどを考えてえらぶ。

墨

この墨の用意が、直接的で、最も基本的なものであろう。なぜなら、一枚の紙を書き上げるのに、必要な墨の量をたっぷりと用意しなければならぬのだから。大きな作品を仕上げるときには、相当な量の墨汁が必要である。どのように用意するかというと、とにかく、時間のある限り、墨をする作業を続ける。墨をすりながら、作品をどのように仕上げていくのかを、イメージしていることが多い。紙にはまだ直接書いてはいないが、一枚の紙に字をどのように置くのかを、墨をすりながらイメージしているのである。筆の運び具合いや、筆の速度などをイメージしながら、墨をする。

ある程度の濃さの墨汁がたまったら、これをガラスびんのような、別の容器にあげておく。こうして、墨汁を常に用意しておく。夏には、墨汁は腐ることがあるので、冷蔵庫に入れておく。この墨汁を書く

識したり、頑張ろうと、張り切りすぎたりしては、途中で息切れしたりして、続いていかない。一枚の紙に向かって、筆をもって対面したときには、それまでの不断の努力の結果などはすべて忘れ去り、無欲に、静かに、そして全身の神経を集中して、取り組んでいくことによって、その人のもっているパワーが噴き出していく。自分が日常の中でできてきていることを、素直に、力まずに、一瞬一瞬の行為の中に発揮するかどうか、よい作品を創り出す条件といえるだろう。そのような時には、書き手は、筆と紙と墨の作り出す質の世界に自分を投入させ、自ら筆の動くままに表現がなされる。そこに「はじまり」があるのである。

言い換えれば、常に「はじまり」はあるのである。今が「はじまり」、一瞬一瞬のすべてが「はじまり」ともいえる。反対に「おわり」はない。ある作品を、期限によって、一応終わらなければならぬとしても、それで「おわり」ではない。また新しい「はじま

り」がはじまる。この連続である。

「書」の世界は、一瞬一瞬の時間性にかかわる表現の分野である。その意味で、まさに子育てと同じなのではないだろうか。子育てのはじまりはいつなのか。赤ちゃんが産まれたときなのか、あるいは、赤ちゃんが母親の胎内にいることがわかった時なのか、あるいは結婚したときなのか、あるいは結婚しようと思ったときなのか、あるいはそれ以前なのか、すなわち、「いつ」が「はじまり」とはかんたんに言えることではないようだ。ということは、いつでもが「はじまり」といえるのではないだろうか。

不断の努力の中で、気張らずに、無理をせずに、一瞬の「はじまり」を受け入れていくことこそ、自身もっている力が、総合的に発揮することができるのだらう。

(埼玉純真女子短期大学)